

1. 「何でも源内」にしない
2. 「源内焼」のバリエーションと変化
- 2-1. 多種多様な器
- 2-2. 発掘資料から考える
- 2-3. 伝世品に見る変化
- 2-4. 3つの時期区分
3. 陶土から製品まで
- 3-1. 陶土
- 3-2. 成形
- 3-3. 焼成
4. どう使われたか
- 4-1. 「通説」への疑問
- 4-2. 遺跡での出土状況
- 4-3. 流通経路
5. 「源内焼」の成立 特に大坂との関係
- 5-1. 「源内焼」の先駆性
- 5-2. 大坂・瓦屋町での陶器生産
- 5-3. 讃岐と大坂との関係性
6. 「それでも源内」という可能性
- 6-1. ネットワークの要としての源内
- 6-2. 「陶器工夫書」をどう読むか
- 6-3. 陶工たちの記憶の源内

そもそも、江戸時代に「源内焼」という呼び名はあったのか？

- ・「四国焼」

1792年（寛政4）器への墨書き
- ・「交趾写」

1782年（天明2）箱書き
- ・「志度辺より出候品（焼物）」

1802年（享和2）高松藩触書
- ・「志度焼」

1854年（嘉永7）『讃岐国名勝図会』巻之四

1857年（安政4）『本朝陶器攷証』一
- ・「源内焼」

1831年（天保2）箱書き

※「天保二辛卯年冬」と「源内焼皿」

書体が異なる一・年号と名称は別の時期に書かれたか
- 源内生前（1779年：安永8まで）……焼物の呼び名は不明

■源内死後死後……「志度焼」（地名）

「交趾写」（焼物のスタイル）

発掘資料のグループ分け

- グループ1
- グループ2
- グループ3

- ・稜花形・輪花形口縁が多い

・口縁・側面の文様帯が二重のものがある

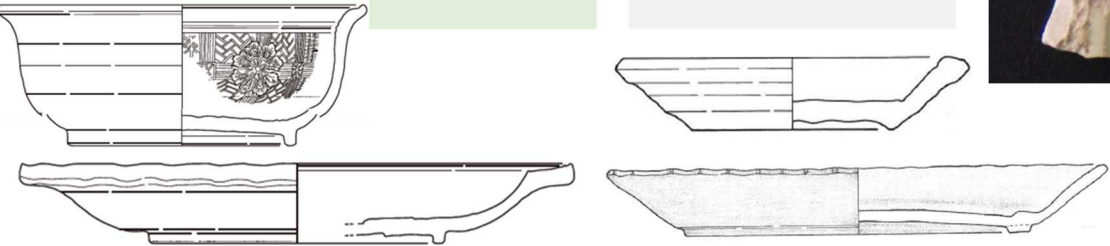
・型押しの文様が細かく緻密

・浮き彫り＋細線の立体的表現

・キメ細かで白っぽく発色する陶土
- ・全体の作りが大味

・文様の彫りが雑

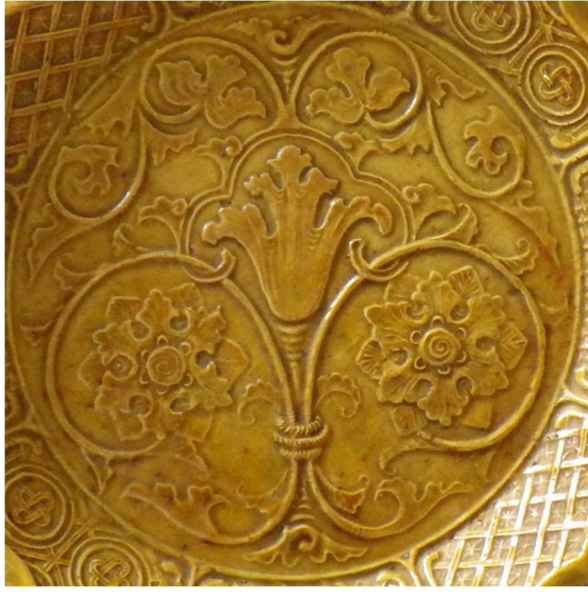
・線だけの平板な文様

・粗く褐色の陶土もある
- 

地図（世界・日本）



植物図(洋風)



山水図(中国)



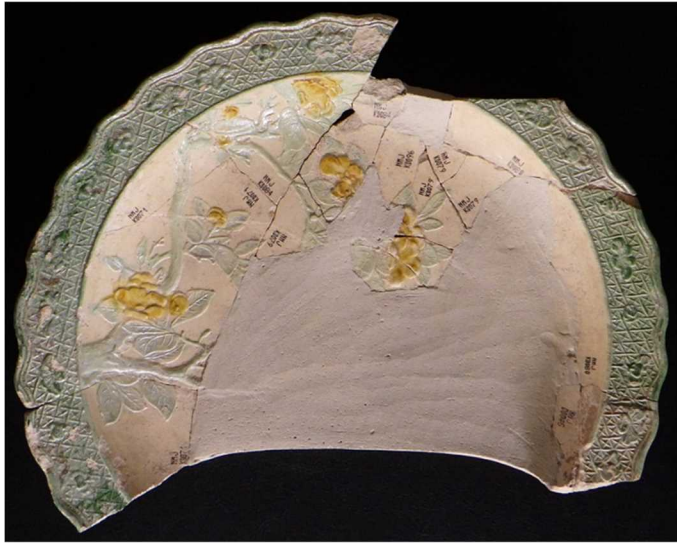
グループ1

丸亀城跡大手町地区 S K1191・S D1283出土資料
18世紀中頃～後半



グループ2

丸亀城跡大手町地区 S K1200・S D1001出土資料
18世紀末～19世紀初頭



グループ3

高松城跡厩跡地区 S X101出土資料
19世紀初頭前半～中頃（1878年まで）



高松城跡松平大膳上屋敷地区 S X2008出土資料
18世紀末～19世紀初頭



3つの時期区分

I 期(1760年代～1800年代、明和～享和)

- ・輪郭 稜花形、輪花形、円形
- ・見込み文様 地図、洋風草花文、山水図、アルファベット風文字文
- ・側面文様 二重の文様帯多い(一重もある)
- ・多種多様な器種のほとんどが出揃う
- ・高台 前半 輪高台中心
後半 蛇の目凹形高台中心



II 期(1800年代～1840年代、文化～天保)

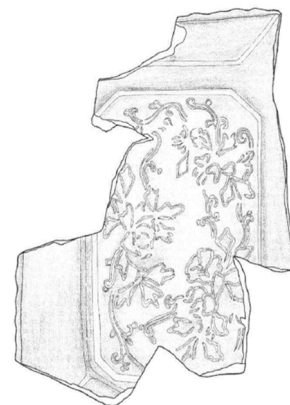
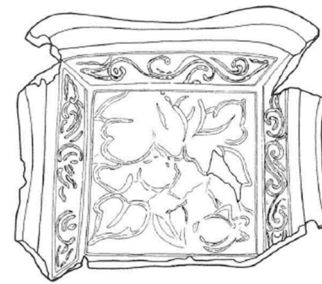
- ・輪郭 輪花形、円形
- ・見込み文様 山水図、日本・中国的草花文、鶴亀文、魚形
- ・側面文様 一重
- ・高台 蛇の目凹形高台中心



桶窯間仕切り材

III 期(1840年代～1860年代、弘化～明治)

- ・輪郭 円形、方形
- ・見込み文様 山水図、日本・中国的草花文、
- ・側面文様 一重、文様なし
- ・高台 輪高台、付高台(不整形)



大坂・瓦屋町での陶器生産



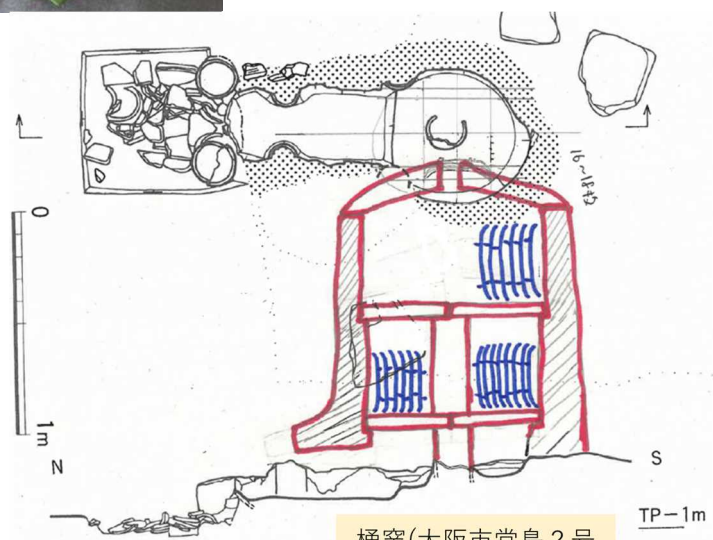
輪郭線を強調させる口縁上面の起伏
細かな地文様なし

瓦屋町遺跡出土素焼き品
所蔵：大阪市教育委員会



平坦な口縁上面に
線・面彫りの地文様

展示資料 1



桶窯(大阪市堂島2号
窯跡から想像復元)

